

# アメリカ合衆国大統領の実像

ぶぎん地域経済研究所  
代表取締役社長 島雄 廣



## 1. はじめに

アメリカにおけるトランプ大統領の評価を知るため、東海岸の三都市(ワシントンDC、フィラデルフィア、ニューヨーク)を訪ねた。

ホワイトハウス前の広場は思いのほか整然としており、日本で報道されるような連日トランプ大統領への抗議のデモが続いているという雰囲気ではなかった。保守系のシンクタンクであるヘリテージ財団は、トランプの政策アドバイザーとして、財団メンバーの三分の一を政権に派遣しているとのことで、当然ながらトランプの政策を評価しつつ提言している。

フィラデルフィアでは、トランプの出身校ペンシルバニア大学でビジネス日本語を教えている日本人女性講師に話を聞いた。大統領選挙の結果が判明し、トランプが勝利した翌日、自身の講座を受講している女子学生が涙を流して悲しんでいた様子が忘れられないと語った。自分の大学のOBがアメリカ大統領となることは、誇りにこそすれ悲しむことではないはずだが、女子学生には「このような人物が大統領になるのは、アメリカの恥だ」という気持ちが強かったようだ。



ペンシルバニア大学

ニューヨークでは、日本人女性のフリージャーナリストの話を知った。フェイク・ニュースなどという言葉を使ってメディア攻撃を繰り返すトランプは、ジャーナリストとして許されざる人物であり、トランプ政権はロシア疑惑や司法妨害などで訴追の可能性がある、混乱の中で早晚失脚するだろうと語っていた。

二人のトランプ評価は厳しいものであった。それは、アメリカ人にとって公の場で口にすることはならない人種差別や女性蔑視の発言、マイノリティーへの暴言などのタブーを、気遣いなく正面から破っていることが許しがたいということだろう。

しかしながら、大統領選挙に出馬表明してから二年近く、有権者らの「試験」を潜り抜けた末に大統領の座を射止めたトランプを、「この大統領はまずいな」と思っても簡単には解任できない。

そして何よりも、ヒラリーではなくトランプがアメリカ大統領に選ばれたのは、多くのアメ

リカ国民がトランプと同じ考えを持っているという証なのではないか。口には出さないが心の中ではトランプと同じことを思っているアメリカ人からすると、「よく言ってくれた」と思っているだろう。多くのアメリカ人が、ヒラリーは表では立派なことを言っているが、裏に回るとずるいことをしている、それに対してトランプは暴言も多いが、いつも本音を言っていると感じたのではないか。

トランプの評価は、大統領としての品格、資質の問題をどう考えるかということだろう。今回、クリントン、ブッシュ、オバマ、トランプの四人の歴代アメリカ大統領を比較してみて感じたことは、オバマは別格として、大統領としての品格、資質面において、トランプとクリントンやブッシュとはそれほど変わらないということだ。

トランプは酒とタバコだけでなく、ドラッグはもとより、コーヒーさえ飲まないらしい。それは、兄フレッドや祖父がアルコール依存症の合併症で死亡し、その兄から「酒とタバコに触れるな」と言われたそうで、トランプはそれを忠実に守っているとのことだ。その理由を聞くと、「輝いていた優秀な人たちが人生を台無しにするのを見たから」と答えたそうだ。

トランプ大統領はこのようなストイックな面を持っているのであるから、言葉の使い方に気を付けて暴言を謹むことが出来れば、今後の大統領としての仕事の成果次第では、評価される可能性も残っているのではないか。

## 2. アメリカについての基礎知識

### (1) 民主党と共和党

民主党と共和党の政策の一番の違いは、民主党が福祉や行政サービスを拡大する「大きな政府」を志向して、その財源としての税収を確保しようとするのに対し、共和党は民間に任せる部分は民間に回して、その分だけ税負担を軽減しようとする「小さな政府」を志向する点にある。

政府の権限を拡大しようとする民主党はコントロールを行う方向に、逆に小さな政府を志向する共和党は規制緩和と自由競争を進めるという方向になっている。

民主党には政府の機能を通じた「正義」の実現をしたいという強烈的なイデオロギーがあり、共和党の思想の背景には自由放任というイデオロギーがある。

アメリカでは、二大政党以外の候補者が最多票を獲得するのは至難の業である。とりわけ大統領選挙では全米50州のうち48州が大統領選挙人を勝者が総取りする方式のため、1852年以来第三政党出身の大統領は存在しない。

### (2) 人種と宗教

オバマ以前は白人男性しか大統領に当選しなかった。しかし、ヒスパニック系やアジア系などの非白人の大統領も遅かれ早かれ誕生するだろう。アメリカの文化をめぐる究極の「壁」は人種ではなく信仰だといわれている。黒人大統領以上に誕生困難だとみられているのは、非キリスト教徒の大統領だ。ユダヤ・キリスト教社会といわれながら、ユダヤ教徒の大統領すらまだ出ていない。ムスリム、仏教徒、無神論者などの大統領を国の象徴として許容する見通しは当面ない。

アメリカ人は先進国の中でも、際立って信仰心の篤い国民である。アメリカ人の44%は、今でも旧約聖書の創世記にある通り、人間は神が造ったという天地創造説を信じており、人間が猿から進化したという



リバティベル（自由の鐘）

ダーウィンの進化論との対立は、現代のアメリカでも決着がついていない。みずからを敗者と認めることを潔しとしない人々には、進化論の適者生存説は容認し難いものであるからだ。

### (3) ポリティカル・コレクトネス(PC)

1950年代以降、アメリカの大学で人種、性その他さまざまな少数集団に対する差別的な言辞や行動を批判、追及する運動が掲げた標語であった。「政治的に適正か」を基準に教師や学生の言動、著書の内容などを点検し、ときには糾弾した。

1970年代にはフェミニズム運動と結びつき、「看護婦」のような女性であることを前提としている用語、「ビジネスマン」のような当然に男性であると決めつける用語に対して、フェミニストが抗議した。そこから発展して、性差別に限らず、人種やセクシャリティへの差別表現をしてはならないという動きになった。

日本でも、女性を表す「スチュワーデス」は「客室乗務員」「キャビン・アテンダント」といった、性別に中立な言葉に改められた。

アメリカでは、ポリティカル・コレクトネスは厳格に適用され、公の場での発言では、少数者差別やそう解釈されかねない言葉は使ってはならないとされた。

しかし、「看護婦」を「看護師」に、「スチュワーデス」を「キャビン・アテンダント」に変えたことで、一体何が変わったのか。この二つの職業に依然として圧倒的に女性が多いという事実に、どれだけの変化が現れたのか。ポリティカル・コレクトネスが、事実としての格差を単なる表現の問題にすり替えてしまったのではないだろうか。

## 3. 歴代大統領の実像

### 第42代 クリントン大統領 (任期1993～2001年) 民主党 1946年生

「It's the economy, stupid」(経済こそが重要なのだ、愚か者)、湾岸戦争で外交成果を挙げた(父)ブッシュに対して勝利した時の発言が有名になったが、不倫と偽証などの正にstupid(バカな、恥ずかしい)な行為で議会から弾劾される汚点を残した。

1946年8月、アーカンソー州の小さな町ホープで生まれた。彼の生家は、黒人と白人の居住区が分かれるあたりにあった。母親が再婚し、クリントンの名乗るようになったが、継父はアル中で、しばしば暴力をふるった。ビル少年は母親をかばうために、間に入って立ちほだかったという。少年時代のトラウマが誰をも喜ばせなければという強迫観念になり、右も左も満足させようとする政治主義になったとか、後の浮気癖の遠因になったとも言われている。

貧しく不幸な家庭に育ったが、戦後アメリカの繁栄の中で青少年時代を送ったベビーブーマー世代であり、アメリカの未来は無条件で良いものになると楽観主義的に信じていたひとりである。

高校生の1963年夏、米在郷軍人会主催の青少年の催しに参加し、ワシントンに行き、ケネディ大統領と握手する機会を得た。これが契機でクリントン青年は政治家を志すようになったという。

1992年の大統領選挙に出馬したクリントンは、ケネディ大統領と握手したときの写真を前面に掲げた。自分はケネディの後継者だという自負だった。

クリントンはイエール大学ロースクールに在学中ヒラリー・ロダムと会い、やがて卒業後に彼女と結婚する。クリントンは黒人の友人を多く持ち、閣僚にも党中枢にも黒人や女性を多用



し、「多様性のアメリカ」をアピールした。歴代の大統領のなかで黒人がもっとも親近感を持った白人大統領であり、セックス・スキャンダルで窮地に立たされたときに、まず救いの手を差し伸べたのは黒人議員団であった。

クリントンの再選の原動力は経済であったが、IT革命に象徴されるハイテク産業、サービス産業の増大が景気を支えた。二期目は議会で弾劾されるという政権最大の汚点も残した。ホワイトハウスでの若いインターンのモニカ・ルインスキーとの不倫と宣誓したうえでの偽証、証拠隠しの司法妨害などにより、下院では過半数で弾劾を決議したが、上院の弾劾裁判では三分の二が賛成しなかったので辞任は免れた。



合衆国議会議事堂

### 第43代 ブッシュ大統領（任期2001～2009年） 共和党 1946年生

アメリカ大統領史上、父子で大統領となった二組目である。「テロとの戦い」で国民を一つにまとめあげるリーダーシップを示し、大統領支持率史上最高(91%)を記録したが、イラクへの侵攻は石油利権獲得が目的だったと解り支持率は史上最低(19%)となった。

父親のような生粋のエリートではなかったが、学歴的には祖父、父と同様、東部の名門私立高校からイエール大学へ進学し、歴代大統領で唯一ハーバード・ビジネススクールのMBA取得者でもある。

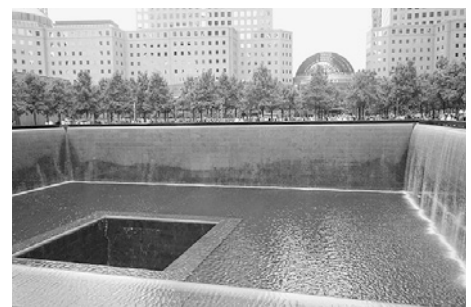
ところが、歴史知識の欠如、希薄な世界認識、語彙の貧困、不明な発音などから、「頭が悪い」印象は拭えなかった。本人自身も母校での演説で、「成績がCでも大統領になれた」と語ったほど、学生時代の成績は良くなかった。因みに、アメリカの成績表は、AA(秀)、A(優)、B(良)、C(可)、D(不可)となっている。

民主党のゴア候補との2000年の大統領選挙は、歴史に残る物議を醸した。全得票数ではゴア候補が数十万票上回っていたにも拘らず、フロリダ州の票差が数百票で、最終的にこの州の選挙人を全てブッシュが獲得したために逆転勝利となった。選挙人数の多いフロリダ州では、弟のジェフ・ブッシュが州知事をしていたので、最終票読みで不正が行われたとも報道された。州最高裁や連邦最高裁が介入する騒ぎとなり、結局ゴア候補が敗北を認めたのは、投票日から一か月余りも後となった。

大統領就任直後に、ITバブルがはじけ、支持率は50%に低迷したが、八か月後の2001年9月11日に同時多発テロ事件が起こり、事件三日後の世界貿易センター跡地における演説で、「テロに対する戦争」を宣言し、国民を一つにまとめるべく危機管理能力を示した。

ブッシュ政権の閣僚は、湾岸戦争の立役者ばかりで、父親から譲られた参謀たちに守られたようだった。パウエル国務長官、チェイニー副大統領、ライス大統領補佐官、ラムズフェルド国防長官らの、いわゆるネオコンの側近たちに後押しされて、積極的な外交を展開していった。

2005年8月29日に、ハリケーン・カトリーナがルイジアナ州ニューオーリンズを直撃し、過去最大級の犠牲者を出したが、政府の対応の不十分さと遅れが非難の的となっ



グランドゼロ

た。災害から住民を守る役目の州兵までイラクへ派兵されていて、地元に対応できなかったのである。

2007年のサブプライムローン危機をきっかけに、世界中に金融危機が拡大し、アメリカの財政もこれまでにないほど悪化した。ブッシュの八年間は、「九月十一日」と「世界同時不況」という、前代未聞の出来事に浮き沈みしながら、その「負の遺産」を次の大統領に預けた形になった。

#### 第44代 オバマ大統領（任期 2009～2017年） 民主党 1961年生

オバマ大統領は、最初の黒人大統領の他にも二つの「はじめて」があった。歴代大統領は皆、本土(四十八州)の生まれだったが、オバマはハワイ州ホノルル生まれ、さらに1960年代生まれの初の大統領でもあった。

母親はカンザス州出身の白人で、ハワイ大学の学生時代、ケニアからの留学生だった父親と出会い、1961年に結婚した。64年に両親は離婚し、バラクは母親と共に暮した。

父親がアフリカ人で黒人ということで、アメリカ社会では混血ではなく、黒人と規定された。人種的に黒人であるだけで、アメリカ本土に生きる「奴隷の子孫」の位置づけとは異なった。このために後に大統領選挙戦で、黒人社会から受け入れられるのに時間がかかった。

母親は、その後インドネシア人留学生と再婚したため、バラクは六歳から十歳までジャカルタの小学校へ通った。中学生になると祖父母が暮すホノルルに戻り、祖父母に育てられた。

大学は、コロンビア大学を卒業後、ハーバード法科大学院に進学した。1989年夏、シカゴの法律事務所で研修したが、そこで将来の「黒人初のファーストレディ」となるミシェルと出会う。

当初ミシェルは、肌の色こそ同じ黒人とはいえ、バラク・フセイン・オバマという名前の特異さと、ハワイ生まれということで、黒人として「同胞」のように感じられなかった。バラクは「半分黒人で、半分白人、ハワイで育ち、インドネシアに住んでいた」異邦人であり続けたということであった。

2004年、ボストンで開催された大統領候補者指名のための民主党大会でのバラクの基調演説「大いなる希望」は、伝説的な演説となり、四年後に大統領選挙に名乗りを上げる画期的な瞬間となった。

2009年4月、大統領就任直後の「プラハ演説」は、若々しくカリスマ性もあった彼の演説力が、国境を越えて世界中の人々に共感を持たれたことを証明した。オバマ大統領はこの「プラハ演説」でノーベル平和賞を受賞したが、演説だけで結果が出ていない受賞に対して、時期尚早との声も多かった。

オバマ第一期政権は、リーマンショックで疲弊した経済危機への対応と、アフガン、イラクと長引く戦争の火消しの役割など、ブッシュ前政権の負の遺産の後始末に追われたような四年間といえるだろう。

2013年9月、シリア空爆の事実上の中止を表明したオバマは、「アメリカは世界の警察官ではない」と語り、国際秩序への積極的な関与から退くことを宣言した。シリア情勢が深刻化する中で、オバマ声明は世界に失望感を与え、現実には就任直後の彼の理想とは裏腹な方向へと進んだ。

ノーベル平和賞受賞の七年後、2016年5月27日、オバマ大統領は広島を訪問した。核廃絶

に向けた国際的な気運のために重要な機会となった。この広島訪問に呼応するように、暮れに日米両首脳がハワイ真珠湾のアリゾナ記念館で、戦死者を慰霊して献花した。

オバマ大統領引退後のミシェルの身の振り方に、人々は関心を集めている。「黒人女性として、どこまで米国社会で大きな役割を果たせるか」、ミシェルへの期待が膨らんでいる。

#### 第45代 トランプ大統領（任期 2017年～） 共和党 1946年生

2004年放映開始されたNBCのリアリティ番組「アプレンティス」(奉公人)に司会兼制作者として参加、決め台詞「You're fired」(お前はクビだ)で空前の人気番組となり、トランプは全米の人気者となった。三十年以上もテレビのお笑い番組などに出演し続けてきたことから、ゴシップやスキャンダル攻撃に晒されても少しもこたえない。

トランプ家は、1885年にドイツから移民してきた祖父フリードリッヒから始まった。TRUMPFという独語綴りから、Fを取ったらしい。白人でプロテスタントであるが、アングロサクソン民族ではないので、アメリカの主流をなすWASPではなかった。

移民三世代目のトランプは、ニューヨーク・クイーンズ地区で裕福な家庭の子供として育った。十三歳まで地元の学校に通っていたが、素行不良のために陸軍幼年学校へ転校させられた。1964年に地元ニューヨーク・ブロンクス区にあるフォーダム大学に通ったが、父親の不動産を手伝うために、不動産の専門学科があったペンシルバニア大学経営学部へ転校した。

1970年代、オフィスビル開発、ホテルやカジノ経営など積極的に進出して、レーガン政権下の1980年代には大成功を収めて「アメリカの不動産王」の名をほしいままにした。

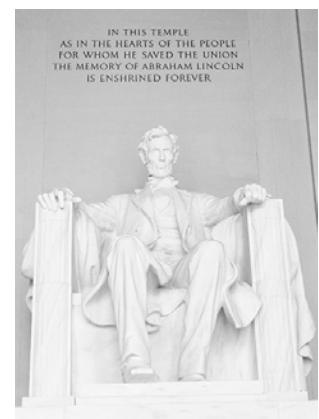
トランプは人生で二回大きな危機を生き延びてきた。最初は1990年の不況。1992年までにトランプの経営するホテルは相次いで倒産し、三つのカジノもつぶれた。この時の負債総額は一兆円ともいわれている。メディアからは「借金王」と嘲られた。二度目の危機は、2008年のリーマンショック。トランプも打撃を受けたが、抜け目なく「売れるものは何でも素早く売って」身軽になっていた。カジノは2014年に破産法の適用を申請した。

トランプは、プロテスタント教会のプレスビテリアン(長老派)に属している。長老派の考え方は、生まれる前から選ばれている人がいて、絶対に成功する。だから、神様に選ばれたことを感謝し、自分の能力を世のため人のために使えという考え方であり、どんな逆境にも絶対に負けない代わり絶対に反省しない。

「アメリカ・ファースト」という言葉は、「アメリカが一番」という意味ではなく、「アメリカの国内問題が優先(ファースト)、外国のことは二の次(セカンダリー)」という意味のようだ。トランプ大統領には、アメリカ大統領が持つ強大な力を、外交上の駆け引きとするのではなく、真の世界平和のために使うことを願ってやまない。

#### 参考文献

- 「アメリカの社会と政治」 五十嵐 武士編 (有斐閣ブックス 1998年)
- 「アメリカン・デモクラシーの逆説」 渡辺 靖 (岩波新書 2013年)
- 「アメリカ政治の壁」 渡辺 将人 (岩波新書 2016年)
- 「民主党のアメリカ 共和党のアメリカ」 冷泉 彰彦 (日経新聞出版社 2016年)
- 「アメリカ大統領物語」 猿谷 要編 (新書館 2017年増補)
- 「リベラルという病」 山口 真由 (新潮新書 2017年)



リンカーン記念堂